

第29回日本気象学会夏期特別セミナー (気象若手夏の学校) 開催報告

第29回日本気象学会夏の学校実行委員会
(吉岡大秋*1・山本雄平*2ほか)

1. はじめに

第29回日本気象学会夏期特別セミナー(以降、夏の学校とします)が、2017年9月8日から10日までの二泊三日の日程で、滋賀県高島市にある奥琵琶湖マキノパークホテル&セミナーハウスにおいて、京都大学(京都大学大気海洋系学生、計25名)が主幹となって開催されました。全国から総勢107名の方々にご参加いただきました。参加者の内訳は、学部生33名、修士47名、博士18名、社会人9名でありました。

今回は、例年の主な企画である招待講演に加えて、第22回夏の学校にて行われた参加者全員による口頭発表が行われ、勉強及び活発な議論の場となりました(第22回日本気象学会夏の学校実行委員会 2010)。ま



第1図 集合写真(2日目)。

た、夜には懇親会が催され、参加者の間で深い親睦が築かれました。非常に充実した3日間になったと感じております。今回の夏の学校の詳細については、Webページに掲載しております(<https://sites.google.com/site/meteorologynatugaku2017/>)。

(吉岡大秋)

2. 招待講演

研究者2名と気象キャスター1名を講師としてお招きし、1日目と3日目に各1時間程度ご講演いただきました。講演内容は以下の通りです。

重 尚一氏(京都大学大学院理学研究科准教授)

『『偶然(たまたま)』の重要性』

重准教授には、学部時代から現在に至るまでの体験エピソードと、これまでのご研究についてお話しいただきました。また、ご自身の過去の経験が後になって予期しない場面で役に立った例をいくつか挙げながら、今置かれている環境に従順に向き合って力をつけることと、得られた経験に柔軟性を持たせて活かすことの重要性を教えてくださいました。

酒井 敏氏(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

「フラクタル日除け—自然は完璧を目指さない—」

酒井教授には、フラクタル日除けを発明された経緯、日中の都市が郊外に比べて暑い理由は気温ではなく輻射熱にあるという仕組みを解説していただき、自然をよく観察することの大切さを教えていただきました。また、フラクタルと密接な関係を持つカオスやスケールフリー性といった重要な概念を通して、参加者の今後に鼓舞していただきました。

*1 (連絡責任著者) Hiroaki YOSHIOKA, 京都大学大学院理学研究科。

〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄。

meteorologyss2017.kyoto@gmail.com

*2 Yuhei YAMAMOTO, 京都大学大学院理学研究科。

© 2017 日本気象学会

広瀬 駿氏（気象予報士：MBS，南気象予報士事務所）

「お天気キャスターせきらら白書」

広瀬氏には、気象キャスターを目指された動機・経緯や、日々のキャスター業の仕事内容についてお話いただきました。また、業務に対するご自身の心掛けややりがいについて教えていただき、キャスター業界の現状にも触れながら、気象予報士を目指す参加者への助言をいただきました。

（山本雄平）

3. 一般講演

例年の夏の学校では、希望者による20件程度の口頭・ポスター発表が一般講演として行われております。しかし今回の夏の学校では、参加者全員が自身の研究内容や興味を持っている内容について、学会形式で発表する機会を2日目に設けました。この企画は、第22回に行われた一般講演を参考にしており、基本的な形

式を踏襲しております。自分以外で同様の研究テーマを持つ人と知り合うこと、及び自分が何に興味（疑問）を持ち、それとどう向き合っているのかを知ってもらうことを目的としております。また、社会人の方には、ご自身の企業・会社の業務や気象の研究との関連についてもお話してもらい、就職活動をする参加者への助言をいただきました。懇親会の座席割りを一般講演のセッションと対応させることで、自分と近い研究テーマの人とお話する時間を例年よりも長く取れるようにしました。

発表は12のセッションに分け、一つの会場で1日4セッション、つまり同時に3つの会場を利用して行われました（第1表）。気象学会大会同様、会場間は移動可能なので、基本的にそれぞれ興味のある発表を自由に選んで聞いていただけたと思っております。発表時間は、5・10・15分の中から選択できるようにしました。その際に興味の対象も選択してもらい、発表セッションに分類する際の参考にしました。発表時には

司会・進行役として各セッションに座長を配置し、その補助を京都大学の学生スタッフが分担して行いました。第2図に、一般講演の様子を示します。

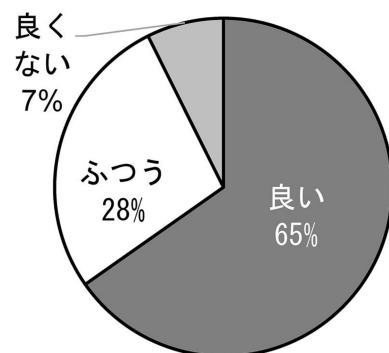
セッションにより発表件数にばらつきがあったため、会場によってはプログラムの遅延も発生しましたが、大きな問題が生じる事無く無事に終了することが

第1表 一般講演タイムテーブル。

時間	A会場	B会場	C会場
AM1 09:00~10:30	乱流・強風 (6名)	気候システム (9名)	メソ気象 (9名)
AM2 10:30~12:00	気象予報・データ同化 (7名)	気候システム・中高緯度大気 (6名)	局地気象 (9名)
PM1 13:20~14:50	大気境界層・植生 (7名)	大規模波動 (9名)	雲物理・積雲対流 (9名)
PM2 14:50~16:20	観測手法・物質循環 (12名)	総観規模・惑星大気・大規模気象・中層大気 (13名)	台風 (8名)



第2図 一般講演の様子。



第3図 一般講演アンケート（「今年の一般講演の参加者全員発表はどうでしたか？」）結果。

できました。また一般講演終了後には、学生の発表を対象に、最も印象に残った発表を選んで投票していただきました。この結果は2日目夜の懇親会にて発表し、優秀発表者賞として3名を表彰いたしました。

参加者全員発表の一般講演に対するアンケート結果の一部を第3図に示します（全参加者の約90%から匿名で回答をいただきました）。「今年の一般講演の参加者全員発表はどうでしたか？」という質問に対して、「良い」が65%となりました。また、「全員発表は続けた方が良いと思いました。」や「様々な方の研究内容が知れて良かったです。」など、夏の学校における参加者全員発表に肯定的なコメントを多くいただきました。一方で「質疑応答がもっと盛んになるといいと思いました。」や「学部生や修士の学生が質問しやすいように何かした方がいいのかもしれませんが。」といった、より活発な議論を行うためのご意見もいただきました。第22回を最後に夏の学校では参加者全員発表は行われておらず、スタッフに経験者がいなかったこと、参加者の発表希望する分野にバラつきがあったことなどから、細かい対応が出来なかったことが反省点として挙げられます。

（吉岡大秋）

4. おわりに

夏の学校にご参加いただいたみなさまに、深く感謝申し上げます。また、第28回夏の学校実行委員会（主幹東京大学、代表シェリフ多田野サム氏）には、多岐に渡って運営の助言をいただきました。さらに、今回も日本気象学会から資金援助を受けました。おかげさまで内容の濃い、素晴らしいセミナーにすることが出来ました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

次回（2018年）の第30回夏の学校は、名古屋大学が主幹となり開催される予定です。充実したセミナーとなることを願うとともに、それを通して学生・若手研究者間の交流が更に活発になることを期待しております。

（吉岡大秋）

参 考 文 献

第22回日本気象学会夏の学校実行委員会，2010：第22回日本気象学会夏期特別セミナー（若手会夏の学校）の報告．天気，57，813-815．